

太田下町眼科新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

太田下・須川遺跡

(第4次調査)

2018年9月

山地 英孝
高松市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、太田下町眼科新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松市太田下町に所在する太田下・須川遺跡第4次調査の報告を収録した。
2. 発掘調査地及び調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調 査 地：高松市太田下町字須川 2457 番 5 の一部、2457 番 1、2455 番 6
調査期間：平成 29 年 10 月 23 日～10 月 27 日
調査面積：約 300 m²
3. 発掘調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 梶原慎司及び同課非常勤嘱託職員 磯崎福子・益崎卓己が担当した。
4. 本報告書の執筆及び編集は梶原が担当した。
5. 本報告書の高度値は海拔高を表し、方位は座標北を表す。
6. 遺構断面の注記の色調及び土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 36 版』を参照した。
7. 本報告書の挿図として、高松市都市計画図 2,500 分の 1「太田」及び国土地理院地形図 2 万 5 千分の 1「高松市南部」を一部改変して使用した。
8. 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。

目 次

第 I 章 調査の経緯と経過

- 第 1 節 調査の経緯・・・・・・・・・・ 1
- 第 2 節 調査の経過・・・・・・・・・・ 1

第 II 章 地理的・歴史的環境

- 第 1 節 地理的環境・・・・・・・・・・ 2
- 第 2 節 歴史的環境・・・・・・・・・・ 2

第 III 章 調査の成果

- 第 1 節 調査方法・・・・・・・・・・ 6
- 第 2 節 基本層序・・・・・・・・・・ 6
- 第 3 節 遺構・遺物・・・・・・・・・・ 6

第 IV 章 まとめ・・・・・・・・・・ 18

挿 図 表 目 次

- 第 1 図 調査位置図 (S=1/2, 500)・・・・・・ 1
- 第 2 図 高松平野と遺跡の位置・・・・・・ 2
- 第 3 図 周辺の主要遺跡分布図・・・・・・ 3
- 第 4 図 遺構配置図 (S=1/150)・・・・・・ 5
- 第 5 図 調査区西壁面土層図 (S=1/40)・・・・ 6
- 第 6 図 SD01 平・断面図 (S=1/80・40)・・・・ 7
- 第 7 図 SD01 出土遺物 (S=1/4)・・・・・・ 7
- 第 8 図 SJ01, 02 平・断面図 (S=1/20)・・・・ 8
- 第 9 図 SJ01 出土遺物 (S=1/4)・・・・・・ 8
- 第 10 図 SJ02 出土遺物 (S=1/4)・・・・・・ 9
- 第 11 図 土坑平・断面図 1 (S=1/40)・・・・ 11
- 第 12 図 土坑平・断面図 2 (S=1/40)・・・・ 13
- 第 13 図 SH01 平・断面図 (S=1/40)・・・・ 14
- 第 14 図 SH01 遺物出土状況図 (S=1/40)・・・・ 15
- 第 15 図 SH01 ピット平・断面図
(S=1/40)・・・・・・・・・・・・・・ 15
- 第 16 図 SH01 出土遺物 (S=1/4)・・・・・・ 16
- 第 17 図 調査地周辺の地形と検出遺構
(S=1/1, 700)・・・・・・・・・・・・ 19・20
- 第 1 表 土器観察表・・・・・・・・・・・・ 17

写 真 図 版 目 次

- 図版 1 SH01 遺物出土状況
- 図版 2 調査前風景
基本層序
SD01 完掘状況
SD01 遺物出土状況
SD01 断面 (遠景・近景)
SD01 出土遺物 (1)
- 図版 3 SJ01 検出状況
SJ01 完掘状況
SJ01 出土遺物 (2)
SJ02 検出状況
SJ02 完掘状況
SJ02 出土遺物 (4)
- 図版 4 SH01 検出状況
SH01 遺物出土状況 (5・6)
SH01 遺物出土状況 (7～11)
- 図版 5 SH01 完掘状況
SH01 断面
SH01 出土遺物
- 図版 6 SK02 検出状況
SK02 断面
SK03 完掘状況
SK03 断面
SK07 検出状況
SK07 断面
SK11 完掘状況
SK11 断面

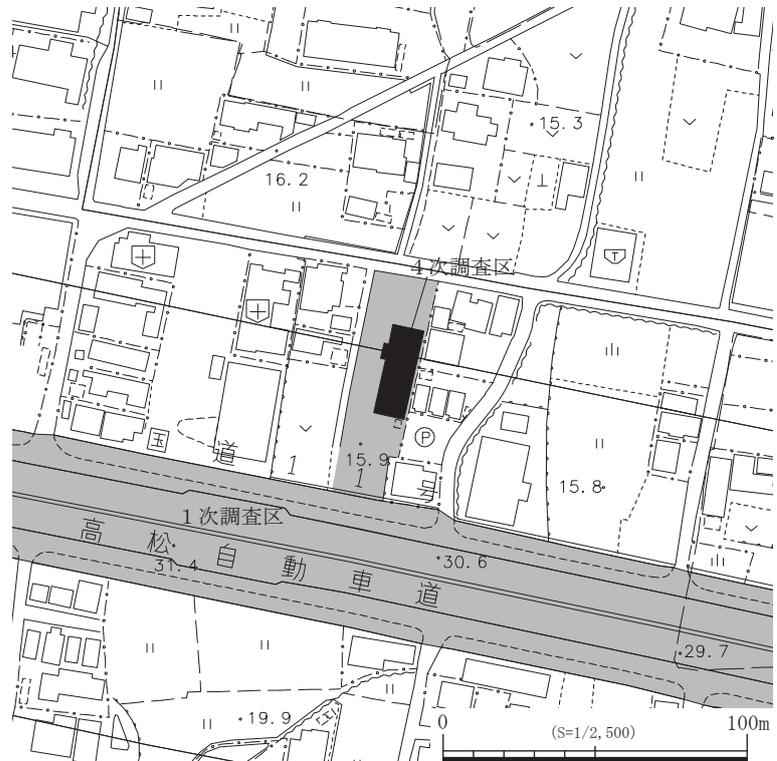
第 I 章 調査の経緯と経過

第 1 節 調査の経緯

当該地での眼科新築工事計画に際し、事業者から高松市教育委員会（以下、市教委）に対し埋蔵文化財包蔵地の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「太田下・須川遺跡」に隣接することから、平成 29 年 8 月 8 日付けで埋蔵文化財の試掘調査依頼が提出された。同年 8 月 23 日に試掘調査を実施した結果、当該地で遺構・遺物を確認したことから、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「太田下・須川遺跡」の範囲に追加登録された。

その後、事業者から平成 29 年 9 月 7 日付けで文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく発掘届出が提出され、市教委から香川県教育委員会

へ進達したところ、9 月 20 日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう行政指導があった。これを受けて市教委は事業者と協議を行い、発掘調査を実施し記録保存を行うことで合意し、平成 29 年 10 月 19 日付けで埋蔵文化財調査協定書を締結した。これに基づき市教委は発掘調査を実施した。



第 1 図 調査区位置図 (S=1/2, 500)

第 2 節 調査の経過

発掘調査は平成 29 年 10 月 23 日から開始し、10 月 27 日に終了した。調査の主な工程は以下の通りである。

- | | |
|-----------|---------------------------|
| 10 月 23 日 | 調査地東区南側を重機掘削、遺構検出、遺構掘削 |
| 10 月 24 日 | 調査地東区北側を重機掘削、竪穴建物跡検出、遺構掘削 |
| 10 月 25 日 | 調査地西区南側を重機掘削、遺構検出、遺構掘削 |
| 10 月 26 日 | 調査地西区北側を重機掘削、遺構検出、遺構掘削 |
| 10 月 27 日 | 竪穴建物跡掘削、完掘状況の写真撮影、調査終了 |

整理作業は平成 30 年 3 月 1 日から開始し、同年 9 月 20 日に終了した。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。現在高松平野には、東から新川、春日川、詰田川、御坊川、石清尾山山塊を挟み香東川、本津川が北流しているが、中でも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしている。現在の香東川は近世初頭に生駒家の家臣西嶋八兵衛によって改修されたものであり、かつては石清尾山塊の南麓から平野中央部を東北流する主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、旧ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りを留めている。

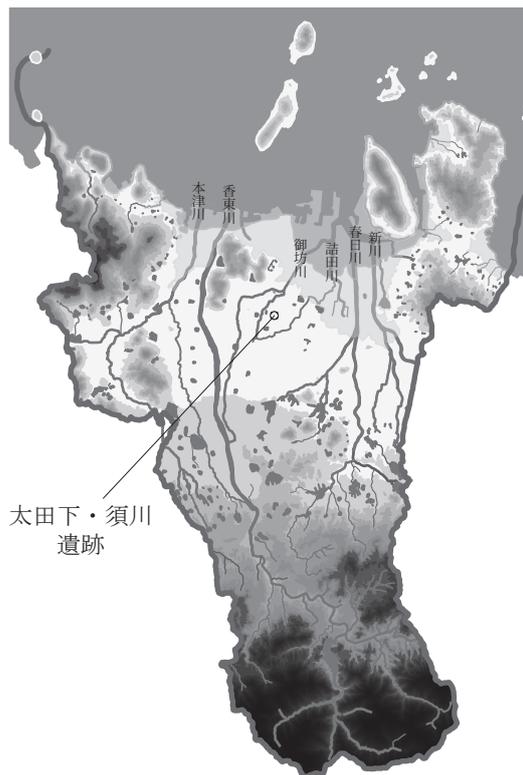
高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野への流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、早くからため池を築造して水不足を解消してきた。これらのため池は、年間1,000ミリ前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。

今回発掘調査を行った太田下・須川遺跡は、これまで3次の発掘調査が行われている。中でも、香川県教育委員会が行った高松東道路建設に伴う発掘調査では、東西に広範囲にわたって調査がなされており、地形や層序等に関する情報が得られている（香川県教委編 1995）。また、波多野篤氏が太田下・須川遺跡周辺の地形についてまとめており（波多野 2014）、周辺の地形についてはそちらを御参照願いたい。東西 630 m・南北 320 mと広範囲に及ぶ太田下・須川遺跡の中で本調査地は低地部にあたり、西にいくと微高地に、東にいくとさらに低地になり旧河道がみられる。

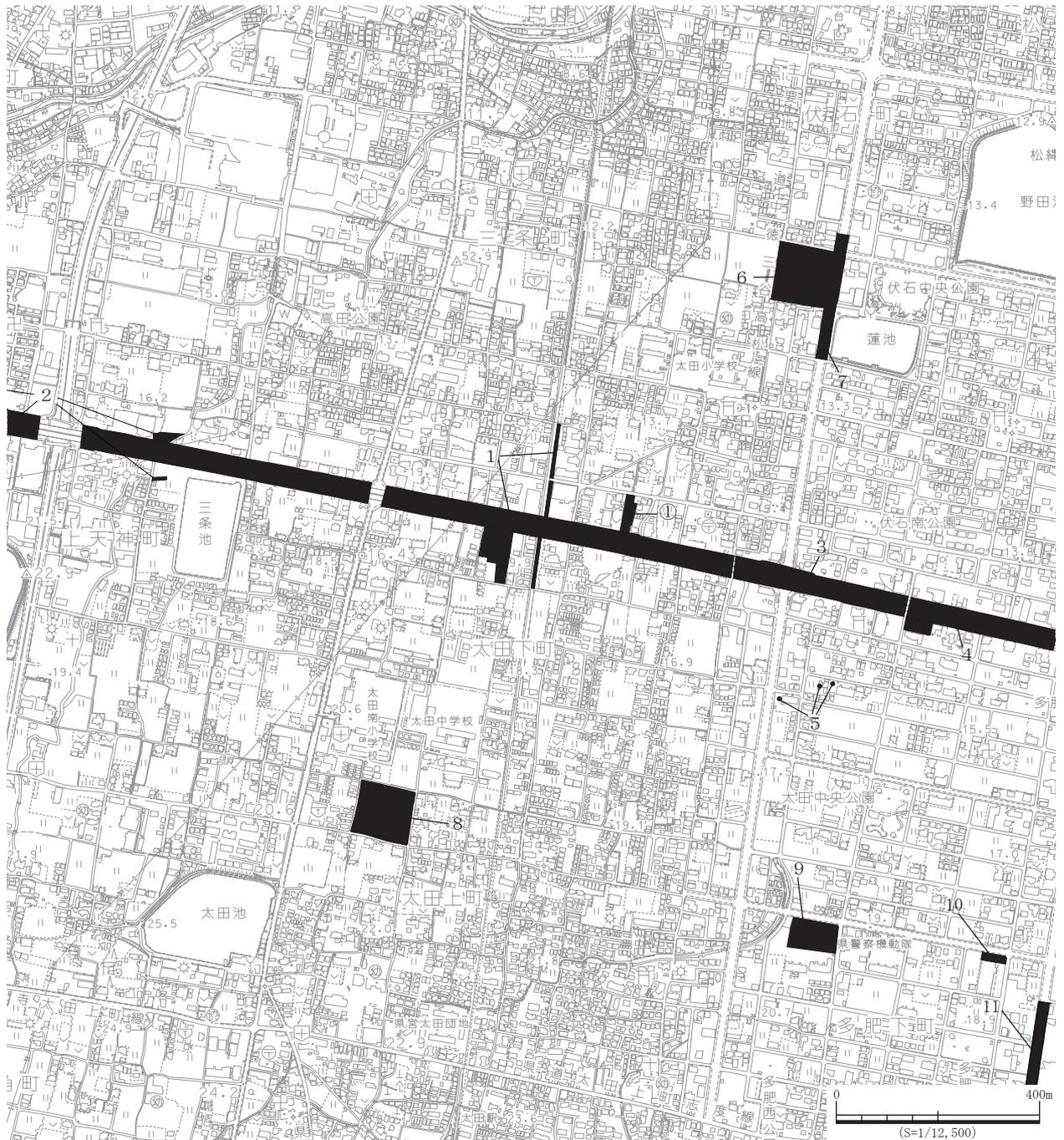
第2節 歴史的環境

高松平野では大規模開発事業の事前調査により、遺跡数が飛躍的に増加した。特に、今回の調査地周辺域においては、高松東道路建設に伴う発掘調査により得られた成果は大きい。ここでは、本遺跡周辺域の動態について述べる。なお、太田下・須川遺跡の過去の調査に関しては、高松東道路建設に伴い香川県教育委員会が行った調査を1次調査（香川県教委編 1995）、国道11号高松東道路関連整備事業に伴い高松市教育委員会が行った調査を2次調査（高松市教委編 2009）、商業施設新築工事に伴い高松市教育委員会が行った調査を3次調査（高松市教委編 2014）とし、本調査を4次調査とする。

旧石器時代及び縄文時代の遺構は本遺跡周辺ではほとんどみられない。居石遺跡で自然流路から縄



第2図 高松平野と遺跡の位置



①：太田下・須川遺跡第4次調査地区 1：太田下・須川遺跡 2：上天神遺跡 3：蛙股遺跡 4：居石遺跡 5：(塚)
 6：佐藤城跡 7：キモンドー遺跡 8：太田城跡 9：汲仏遺跡 10：津以口遺跡 11：凹原遺跡

第3図 周辺の主要遺跡分布図

文時代晩期前半の土器がまとまって出土している程度である。

弥生時代に入ると、前期後半から遺構がみられるようになる。汲仏遺跡では前期後半の二重環濠や土坑、竪穴建物跡の可能性のある遺構が検出されている。凹原遺跡では前期末～中期初頭の環濠とみられる溝や竪穴建物跡が検出されている。中期に入ると遺構はほとんどみられなくなり、後期に再び集落が営まれるようになる。後期前半には上天神遺跡や太田下・須川遺跡、蛙股遺跡で、後期中葉に汲仏遺跡、後期後半には凹原遺跡で竪穴建物跡等がみられるようになる。また、居石遺跡やキモンドー

遺跡でも自然流路から多量の土器が出土している。以上のように、後期になると平野低地部の各地で集落が展開するようになる。

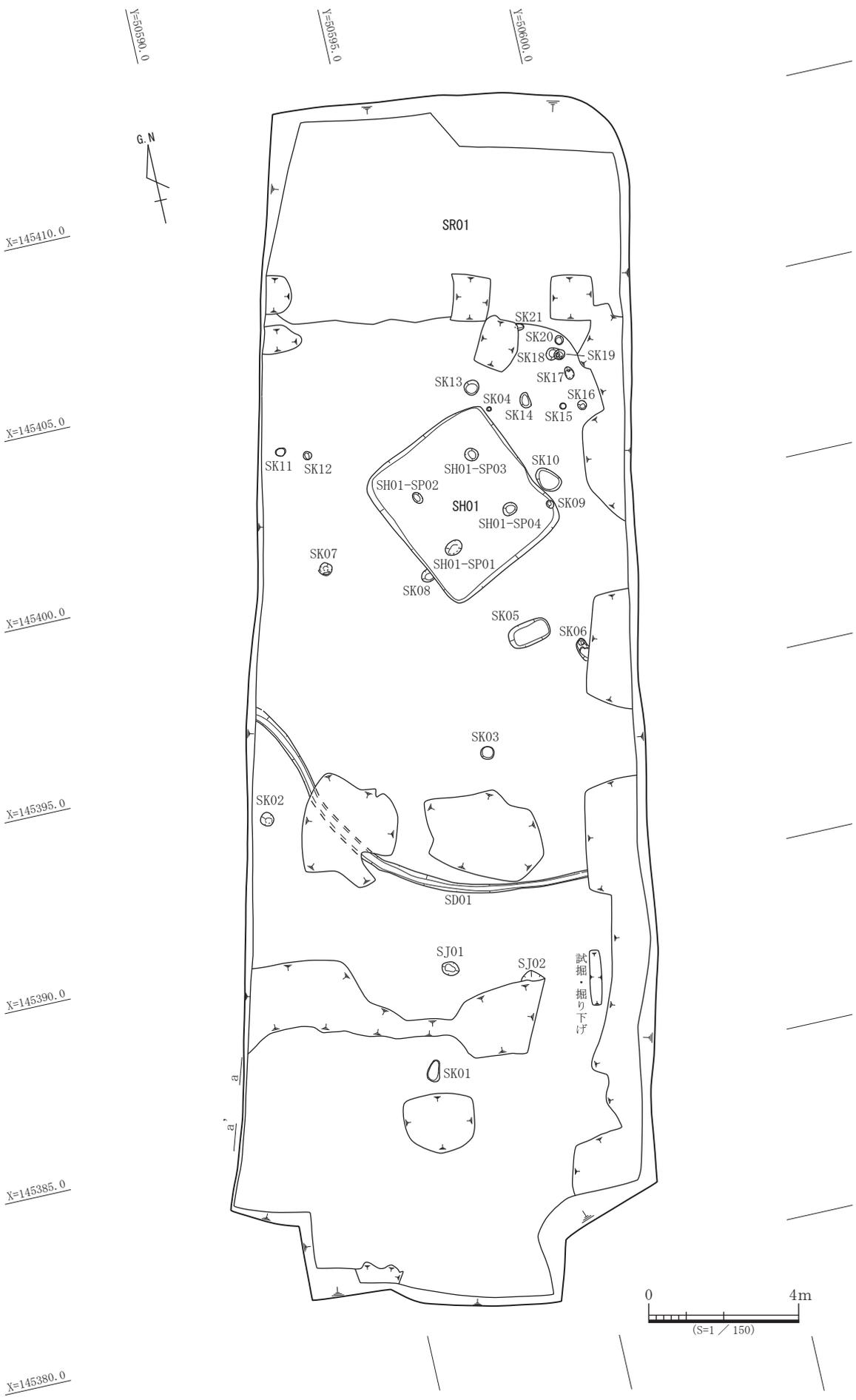
弥生時代後期末に出現した集落が古墳時代前期初頭まで継続する様相が認められるが、前期後半～中期前半になると遺構がみられなくなる。中期後半になると、太田下・須川遺跡で竪穴建物跡等が認められる。他には後期後半に凹原遺跡や居石遺跡で遺構・遺物が散見される。

平安時代には、汲仏遺跡で10世紀の掘立柱建物跡群がみられる。掘立柱建物跡の規模が大きく規則的配置をとるという特徴をもつが、出土遺物の中には官衙的性格を有するものは少ない。蛙股遺跡では11～12世紀の水田跡がみられ、遺跡周辺地が生産域であったことを窺わせる。また、太田下・須川遺跡や居石遺跡では10～11世紀頃に自然流路から大型加工木や齋串などの祭祀遺物が出土しており、水に関する祭祀が行われたと想定される。近隣の多肥松林遺跡群でも同時期に水路や自然流路で祭祀が行われたことが指摘されており、同様な性格を有するだろう。

中世後半になると、近隣では佐藤城跡や太田城跡など平地の居館が出現する。キモンドー遺跡では、佐藤城の南東隅の堀が検出された。堀の両側には一段ないし二段の石垣が残存しており、東西方向の堀には間仕切りの石垣が二ヶ所確認された。そのほか近世の遺構としては、キモンドー遺跡などで土坑等が散見される。

参考文献

- 香川県教育委員会編 1995『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 香川県教育委員会編 1995『上天神遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 香川県埋蔵文化財センター編 2018『汲仏遺跡』香川県教育委員会
- 高松市教育委員会編 1995『蛙股遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第29集
- 高松市教育委員会編 1995『居石遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第30集
- 高松市教育委員会編 1999『キモンドー遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第39集
- 高松市教育委員会編 2000『上西原遺跡 附汲仏遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第47集
- 高松市教育委員会編 2001『凹原遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第56集
- 高松市教育委員会編 2009『太田下・須川遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第124集
- 高松市教育委員会編 2014『太田下・須川遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第151集
- 波多野篤 2014「位置と環境」『太田下・須川遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第151集
- 渡邊誠 2014「弥生時代中期から後期における高松平野の集落動態」『東アジア古文化論攷』1 高倉洋彰先生退職記念論集刊行会



第4図 遺構配置図 (S=1/150)

第三章 調査の成果

第1節 調査方法

調査は、基礎及び地中梁を敷設する範囲を対象とした。ただし、作業の都合のため布掘りではなく面的に調査区を設定し、重機掘削した。当初は掘削した土砂を埋め戻しに用いて調査区を反転する予定で調査区を東西の2区に区分し、東区から重機掘削を開始したが、湧水が激しく埋め戻しが困難であったため掘削した土砂は搬出した。発掘調査は表土から遺構面までを重機により掘削、その後人力により遺構面を精査し遺構掘削を行った。

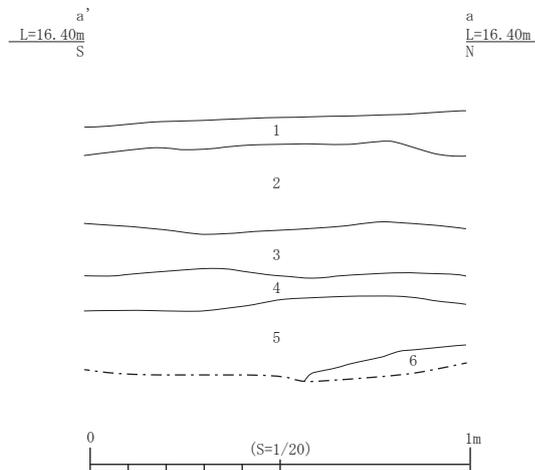
記録に際しては基準点を基に1/20縮尺で平面図及び断面図を作図した。写真撮影は35mmフィルムカメラを用い、モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録し、補助的にデジタルカメラも用いた。

第2節 基本層序

基本層序は大きく4つに分かれる。Ⅰ層は造成土・花崗土で、約0.3m堆積している(第5図1,2層)。Ⅱ層は旧耕作土・床土で、約0.15m堆積している(第5図3,4層)。Ⅲ層は黒褐色シルト層で、0.1~0.2m程度堆積している(第5図5層)。SJ01・02はⅢ層上面から掘り込まれており、Ⅲ層が弥生時代後期前半以前に形成されていたことが判明した。Ⅳ層は地山で、灰色シルト混じり細砂~中粒砂層である(第5図6層)。

当初は遺構検出を5層上面で行っていたが、5層と遺構埋土が近似していることに加え、湧水が激しく遺構検出が困難となった。そのため色調が異なり遺構を十分に認識できる6層上面まで下げて遺構検出を行った。

5層と同様に6層も湧水が激しく、水中ポンプで湧水を汲み取りながら遺構検出・遺構掘削を行った。



1. 造成土
2. 花崗土
3. 5Y4/1 灰シルト混じり細砂 (φ1~3mmの礫を少量含む)
4. 10YR6/1 褐灰シルト混じり中粒砂~細砂
5. 2.5Y3/1 黒褐極細砂~シルト (灰黄色ブロックを3%含む)
6. 5Y6/1 灰シルト混じり細砂~極細砂 (黒褐色粘土ブロックを3%含む)

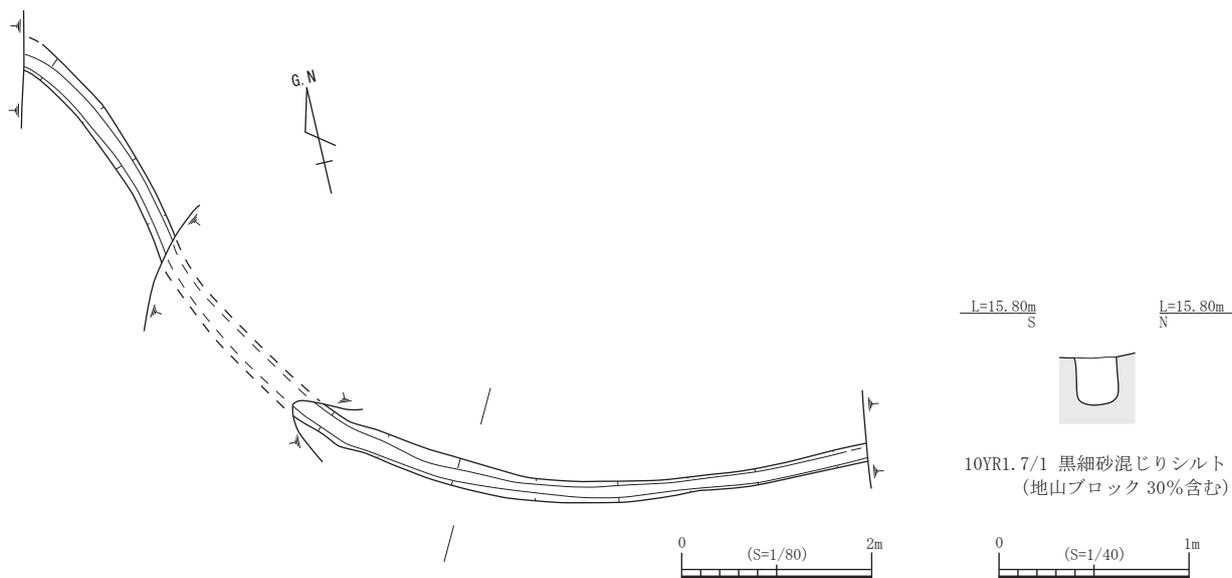
第5図 調査区西壁面(a-a')土層図(S=1/40)

第3節 遺構・遺物

(1) 弥生時代

SD 01

調査区中央やや南で検出した溝で、東西方向に延びる。幅約0.2m、深さ約0.25mで、断面は長方形を呈し、西から東に向かって底面が下がっていく。埋土は黒色細砂混じりシルトである。埋土中には黄橙色シルトの土がマーブル状に混じっており、どちらも地山起源の土と考えられ、人為的に

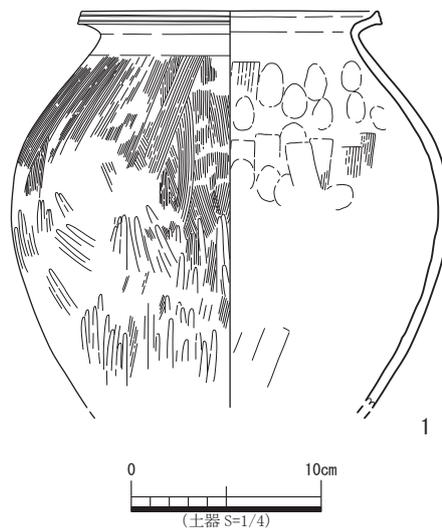


第6図 SD01 平・断面図 (S=1/80・40)

埋めた可能性が高い。遺物は、調査区西端に近い場所で甕(1)が出土した。甕は同一個体の破片が二枚重ねられており、上部は内面を上、下部は外面を上にしていた(写真図版2参照)。本調査区でSD01から出土した遺物は1のみである。

1は甕である。口頸部は強く折り返して短く開く。端部は上下を摘み出してわずかに肥厚し、凹線が二条みられる。外面は胴部上半に刷毛目、胴部下半にミガキが施される。内面はケズリで調整した後にナデが施されており、指頭圧痕が多数みられる。器壁の厚さは約5～6mmである。胎土に角閃石を含むこと、色調がにぶい黄褐色であることから香東川下流域産土器であることが分かる。外面下半には煤が付着している。

所属時期は、出土遺物から弥生時代後期前半と考えられる。

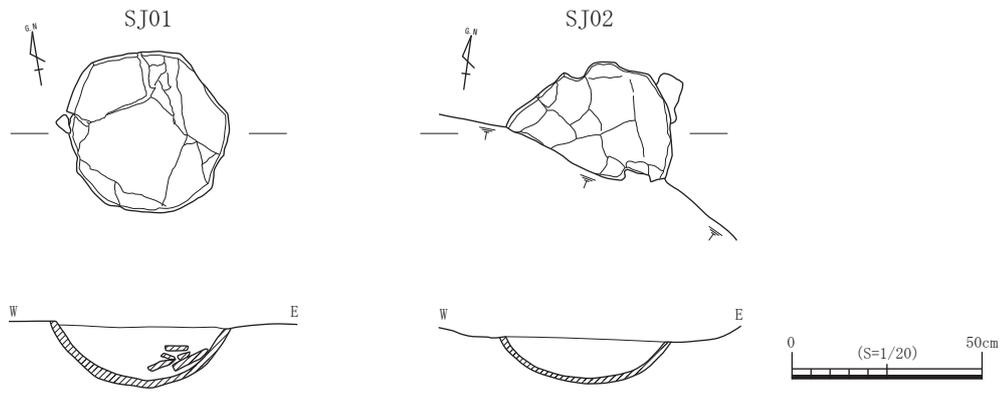


第7図 SD01 出土遺物 (S=1/4)

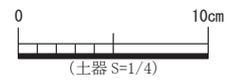
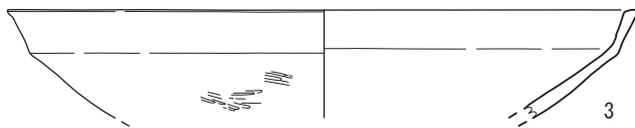
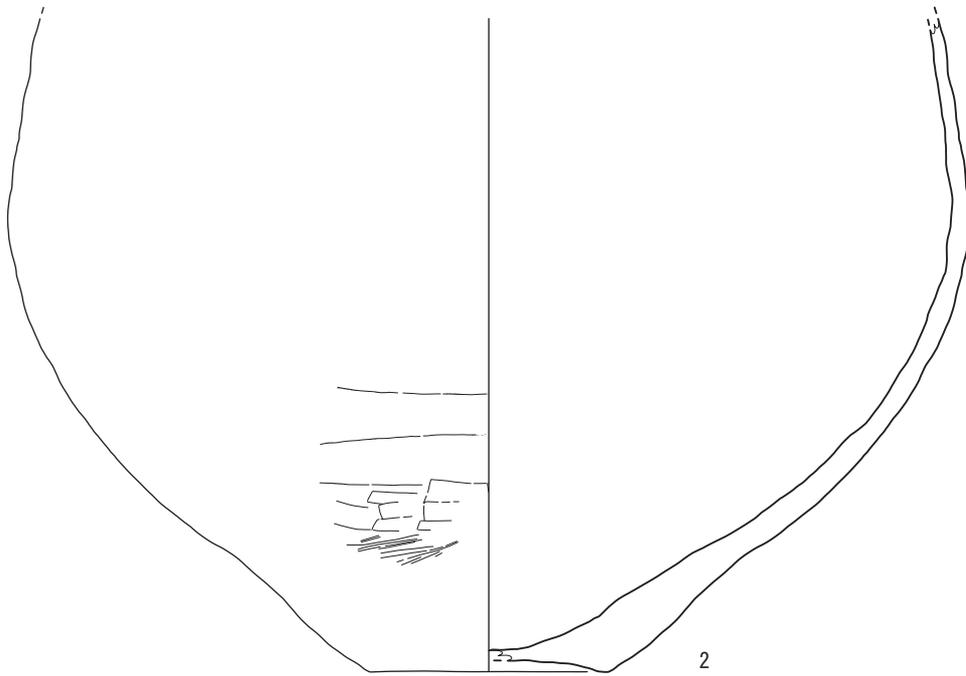
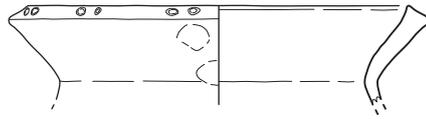
S J 01

調査区中央やや南で検出した土器棺墓である。試掘調査で検出から図面作成・取り上げまで行ったためレベルが図化されていないが、標高約15.3mの位置で検出した。上部は大きく削平されており、高さ0.15mのみ残存していた。壺棺は、底部を西に約45°傾けた状態で埋置されていた。掘方は、遺構埋土と遺構面の土が近似していたため検出できなかった。壺棺の内部の埋土中からは、壺棺の口縁部や高杯の口縁部(3)が出土しており、埋葬時に高杯が蓋に使用された可能性が高い。

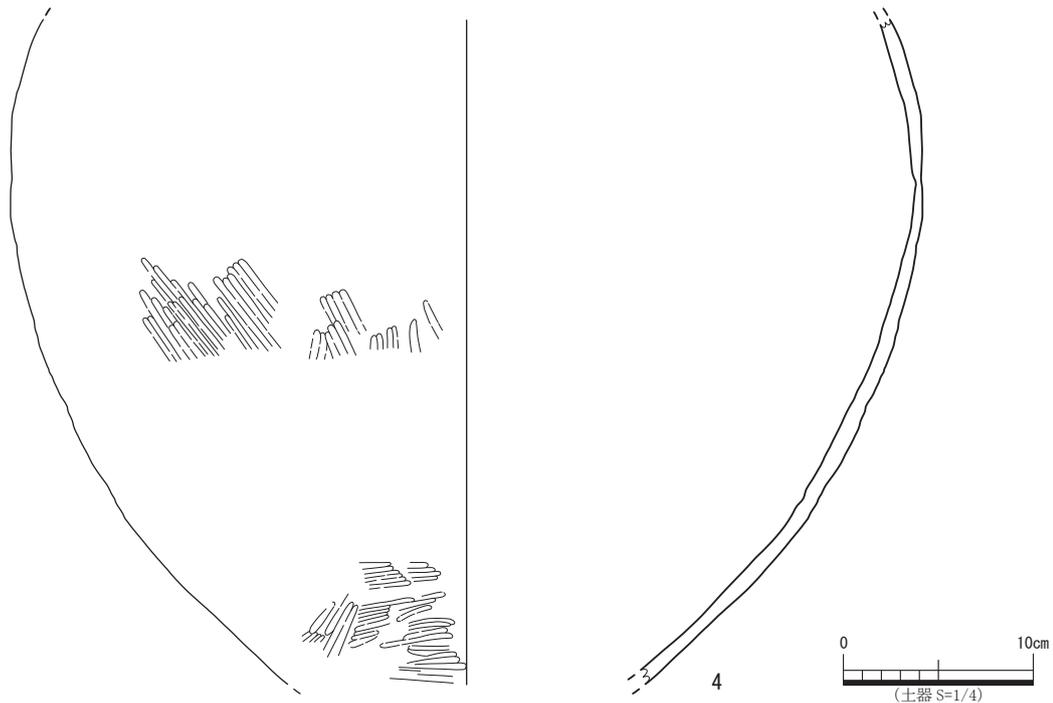
2は壺である。底部から胴部中位まで残存しており、残存器高34.6cm、最大径50.8cmである。大きく球状に張った胴部をもち、底部は直径12.4cmである。内外面ともにナデが施されており、胴部中位の内面で接合痕が幅約2～3cmで見られる。器壁の厚さは約1cmである。胎土に角閃石を含むこと、色調がにぶい黄橙色であることから香東川下流域産土器であることが分かる。壺棺の内部から出土した口縁部は外反しており、復原口径は20.0cmである。端部に竹管文2点が1セットで施さ



第8図 SJ01, 02 平・断面図 (S=1/20)



第9図 SJ01 出土遺物 (S=1/4)



第10図 SJ02 出土遺物 (S=1/4)

れている。3は壺棺の内部から出土した高杯の口縁部で、壺棺の蓋であった可能性が高い。口縁部は緩やかに屈曲し、端部はわずかに外側に肥厚する。外面下半にはミガキが施される。復元口径は33.4cmである。胎土に角閃石を含むこと、色調がにぶい黄橙色であることから香東川下流域産土器であることが分かる。

所属時期は、出土遺物から弥生時代後期前半と考えられる。

S J 02

調査区中央やや南、SJ01の約2.2m東で検出した土器棺墓である。SJ01と同様に、試掘調査で検出から図面作成・取り上げまで行ったためレベルが図化されていないが、標高約15.3mの位置で検出した。上部は大きく削平されており、高さ0.1mのみ残存していた。さらに、南側が現代の攪乱によって削平されていた。掘方は、遺構埋土と遺構面の土が近似していたため検出できなかった。

4は壺である。胴部下半から胴部上半まで残存しており、大きく球状に張った胴部をもつ。残存器高35.3cm、最大径48.0cmである。内外面ともにナデが施されており、外面の一部でミガキがみられる。器壁の厚さは8mm前後である。胎土に角閃石を含むこと、色調がにぶい黄橙色であることから香東川下流域産土器であることが分かる。

所属時期は、出土遺物から弥生時代後期前半と考えられる。

土坑

S K 01

調査区の南で検出した。長軸58cm、短軸30cm、深さ14cmの土坑である。埋土は黄灰色細砂～細粒砂で、遺物は出土しなかった。所属時期は不明である。

S K 02

調査区の南西で検出した。長短軸36cm、深さ20cmの土坑である。埋土は黒色シルトで、遺物は弥

生土器片が3点出土した。図化できなかつたが、甕胴部片と高坏脚部片である。所属時期は、出土遺物から弥生時代後期前半である。

S K 03

調査区の中央で検出した。長軸 36cm、短軸 34cm、深さ 33cm の土坑である。埋土は黒色細砂混じりシルトで、遺物は弥生土器片が2点出土した。所属時期は、出土遺物から弥生時代と考えられる。

S K 04

調査区の中央、竪穴建物跡 (SH01) の北東で検出した。長短軸 12cm、深さ 11cm の土坑である。埋土は黒色中粒砂混じりシルトで、遺物は出土しなかつた。所属時期は不明である。

S K 05

調査区の中央で検出した。長軸 116cm、短軸 62cm、深さ 9cm の土坑である。埋土は黒色シルトで、遺物は弥生土器片が3点出土した。所属時期は、出土遺物から弥生時代と考えられる。

S K 06

調査区の中央東側で検出した。長軸 60cm 以上、短軸 30cm、深さ 6cm の土坑である。埋土は黒色シルトで、遺物は弥生土器片が1点出土した。所属時期は、出土遺物から弥生時代と考えられる。

S K 07

調査区の中央西側で検出した。長短軸 34cm、深さ 25cm の土坑である。埋土は黒色細砂～シルトで、遺物は出土しなかつた。所属時期は不明である。

S K 08

調査区の中央西側で検出した。竪穴建物跡 (SH01) に切られている。長軸 29cm 以上、短軸 32cm、深さ 14cm の土坑である。埋土は黒色中粒砂混じりシルトで、遺物は弥生土器片が10点出土した。所属時期は、出土遺物から弥生時代と考えられる。

S K 09

調査区の中央で検出した。竪穴建物跡 (SH01) の南東で竪穴建物跡を切っている。長軸 22cm、短軸 18cm、深さ 8cm の土坑である。埋土は黒色細砂～シルトで、遺物は出土しなかつた。所属時期は不明である。

S K 10

調査区の中央東側、SH01 の東で検出した。長軸 74cm、短軸 52cm、深さ 10cm の土坑である。埋土は黒色シルトで、遺物は出土しなかつた。所属時期は不明である。

S K 11

調査区の中央西側、SK12 の西で検出した。長軸 28cm、短軸 22cm、深さ 15cm の土坑である。埋土は黒色中粒砂混じりシルトで、遺物は出土しなかつた。所属時期は不明である。

S K 12

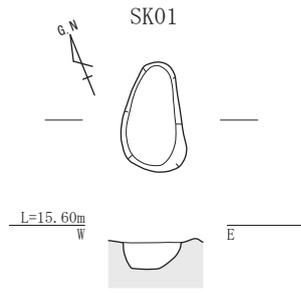
調査区の中央西側で検出した。長短軸 22cm、深さ 11cm の土坑である。埋土は黒色シルトで、遺物は出土しなかつた。所属時期は不明である。

S K 13

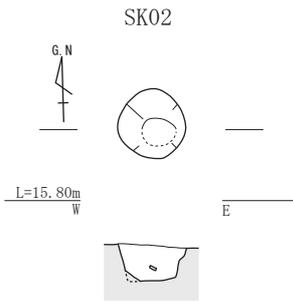
調査区の中央、竪穴建物跡 (SH01) の北で検出した。長短軸 40cm、深さ 27cm の土坑である。埋土は黒色中粒砂混じりシルトで、遺物は弥生土器片が4点出土した。所属時期は、出土遺物から弥生時代と考えられる。

S K 14

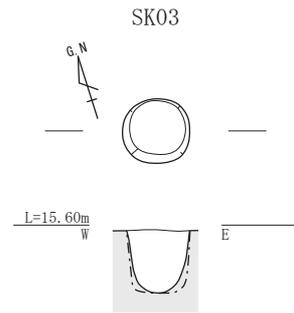
調査区の中央東側、竪穴建物跡 (SH01) の北東で検出した。長軸 42cm、短軸 26cm、深さ 20cm の土



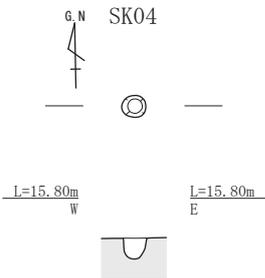
2.5Y4/1 黄灰細砂～極細砂
(中粒砂混じり)



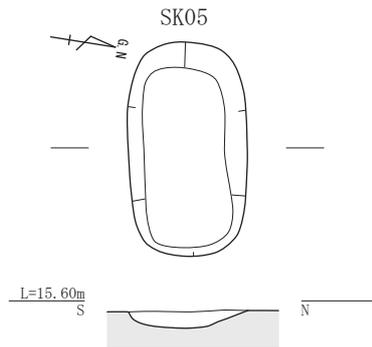
10YR1.7/1 黒シルト
(10YR4/2 灰黄褐シルトブロック 10%含む)



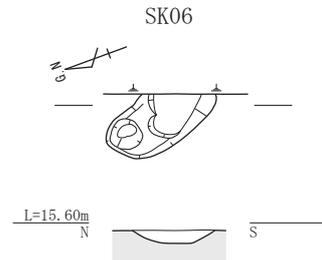
10YR1.7/1 黒細砂混じりシルト
(10YR4/2 灰黄褐粘土ブロック 7%含む)



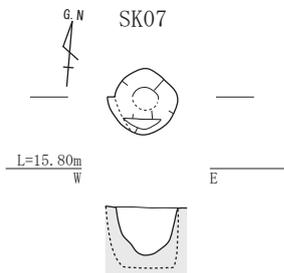
10YR1.7/1 黒中粒砂混じりシルト
(10YR4/2 灰黄褐シルトブロック 5%含む)



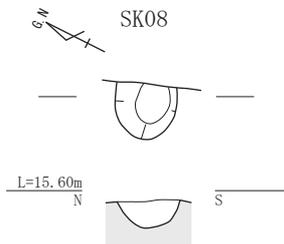
10YR1.7/1 黒シルト



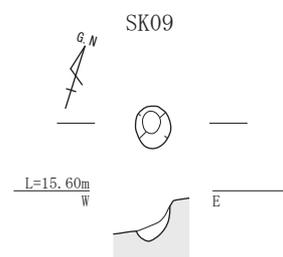
10YR1.7/1 黒シルト～粘土
(10YR4/2 灰黄褐シルトブロック状 10%含む)



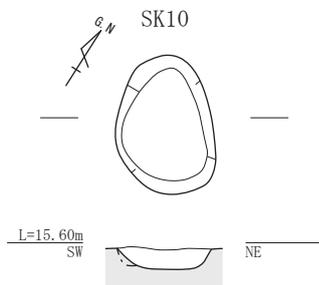
10YR1.7/1 黒細砂～シルト
(10YR4/2 灰黄褐シルトブロック 10%含む)



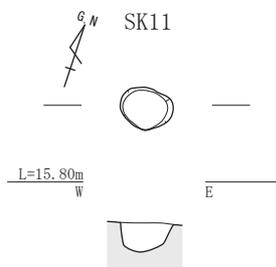
10YR1.7/1 黒中粒砂混じりシルト
(地山ブロック 3%含む)



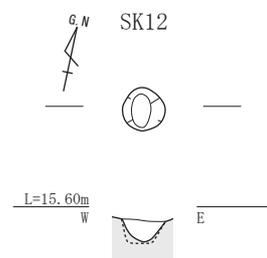
10YR1.7/1 黒細砂～シルト
(地山ブロック 5%含む)



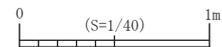
10YR1.7/1 黒シルト



10YR1.7/1 黒中粒砂混じりシルト
(10YR4/2 灰黄褐シルトブロック 10%含む)



10YR1.7/1 黒シルト



第 11 図 土坑平・断面図 1 (S=1/40)

坑である。埋土は黒色中粒砂混じりシルトで、遺物は弥生土器片が7点出土した。図化できなかつたが、甕胴部片が含まれる。所属時期は、出土遺物から弥生時代後期である。

S K 15

調査区の中央東側で検出した。長短軸 16cm、深さ 9cm の土坑である。埋土は黒色シルトで、遺物は出土しなかつた。所属時期は不明である。

S K 16

調査区の中央東側、SK15 の東で検出した。長短軸 25cm、深さ 20cm の土坑である。埋土は黒色細砂混じりシルトで、遺物は土器片が1点出土した。所属時期は不明である。

S K 17

調査区の中央東側、SK16 の北で検出した。長軸 34cm、短軸 23cm、深さ 11cm の土坑である。埋土は黒色シルトで、遺物は出土しなかつた。所属時期は不明である。

S K 18

調査区の中央東側、SK17 の北で検出した。SK19 に切られている。長軸 36cm、短軸 30cm 以上、深さ 20cm の土坑である。埋土は黒色中粒砂混じり細砂～シルトである。遺物は出土しなかつたが、SK19 の時期が弥生時代と考えられることから SK18 は弥生時代以前と考えられる。

S K 19

調査区の中央東側、SK17 の北で検出した。SK18 を切っている。長軸 30cm、短軸 26cm 以上、深さ 13cm の土坑である。埋土は黒色細砂～シルトである。遺物は弥生土器片が1点出土した。所属時期は、出土遺物から弥生時代と考えられる。

S K 20

調査区の北東側、SK18・19 の北で検出した。長軸 24cm、短軸 23cm、深さ 9cm の土坑である。埋土は黒色細粒砂で、遺物は出土しなかつた。所属時期は不明である。

S K 21

調査区の北東側、SK20 の西で検出した。土坑の西側が攪乱に切られている。長軸 19cm 以上、短軸 18cm、深さ 14cm の土坑である。埋土は黒色細砂～シルトで、遺物は弥生土器片が2点出土した。所属時期は、出土遺物から弥生時代と考えられる。

土坑（S K 01～21）の所属時期

土坑の多くは出土遺物から弥生時代後期前半の所産と考えられる。ただし、竪穴建物跡を切っているものもみられるため、一部は古墳時代以降の所産と考えられる。

S R 01

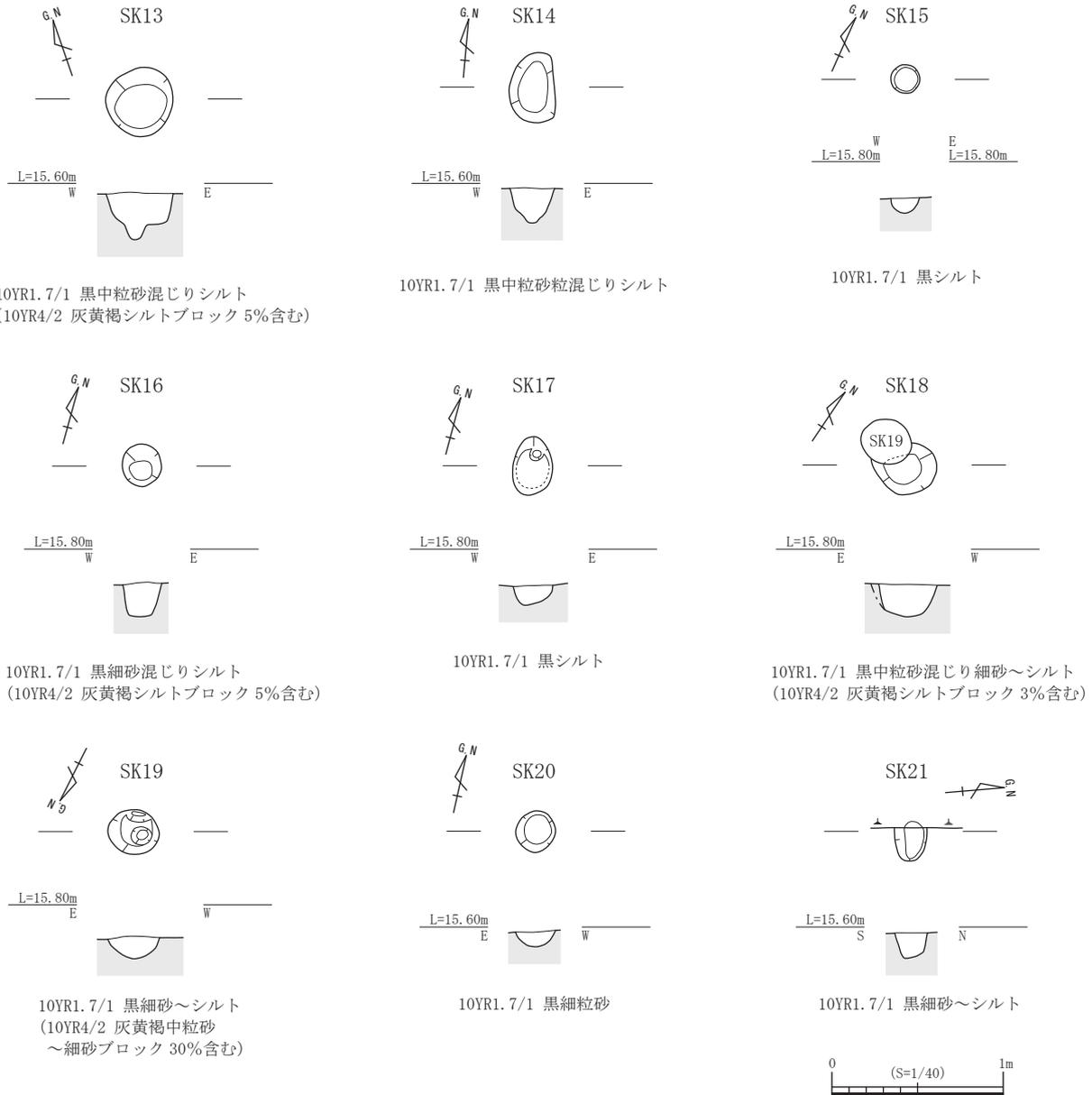
調査区北側で検出した自然流路である。掘削を試みたが、湧水が激しいことや壁面が崩落したことを受け、作業の安全を考慮し掘削を断念した。

SR01 は、1次調査で検出した SR03 に連続すると想定される。そのため、SR01 の所属時期は弥生時代後期であると考えられる。

(2) 古墳時代

S H 01

調査区中央やや北で検出した竪穴建物跡である。SK09 に切られる。平面形状は、長辺（北西—南東）

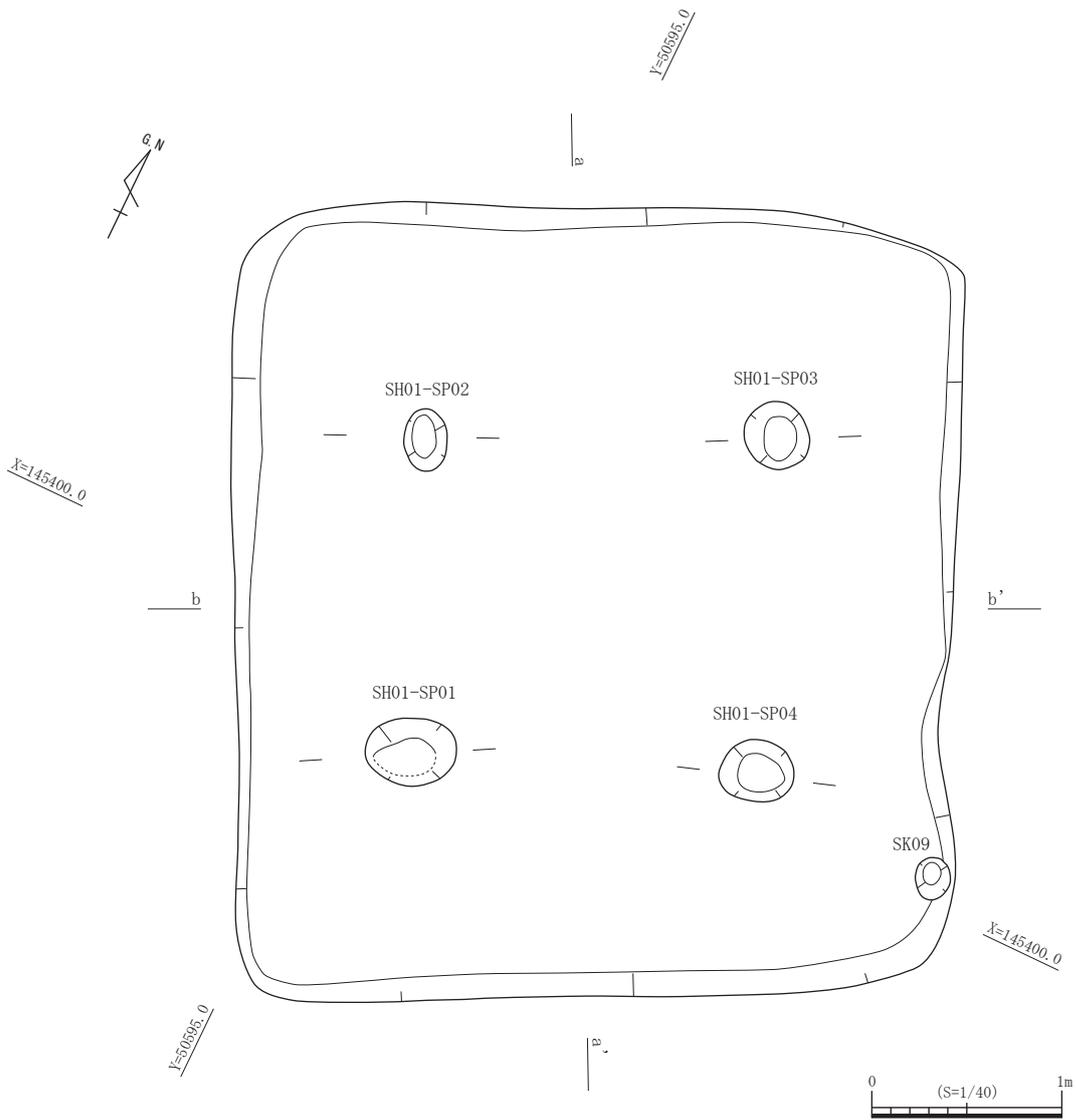


第 12 図 土坑平・断面図 2 (S=1/40)

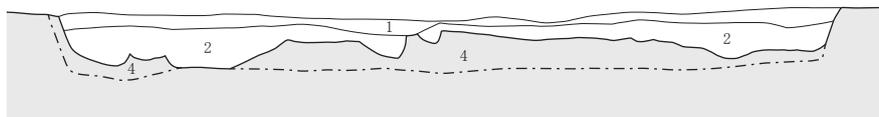
4.2 m、短辺（南西—北東）3.8 mの隅丸方形を呈する。検出高は約 15.25 mで、残存深度は 0.15 ～ 0.25 mである。主軸方位は、N26.5°Wである。

主柱穴は 4 基確認した。埋土は黒色中粒砂混じりシルトである。カマド等の施設は確認できなかった。なお、平面で確認した際には壁溝を検出できなかったが、断面東端で壁溝を検出した。貼床は灰色シルト混じり黒色粘質土で、埋土は黒色粘質土である。断面をみると、掘方底面の凹凸が激しい。これは堅穴建物跡に切られた土坑の可能性もある。これら土坑の検出ができなかった理由としては、貼床よりレベルが低くなると湧水が激しさを増したため平面での遺構検出が困難になったことが挙げられる。

遺物は、貼床直上で高杯の杯部 5 点と脚部 2 点が北西隅と北隅の二箇所でもとまって出土した。北西隅では、高杯の杯部 2 点が順位で出土した。北隅では高杯の杯部 2 点が順位で 1 点が逆位、脚部は 2 点が逆位で出土した。また、図化できなかったが西隅では甕の胴部片が内面を上にして出土した。



SH01 南北断面

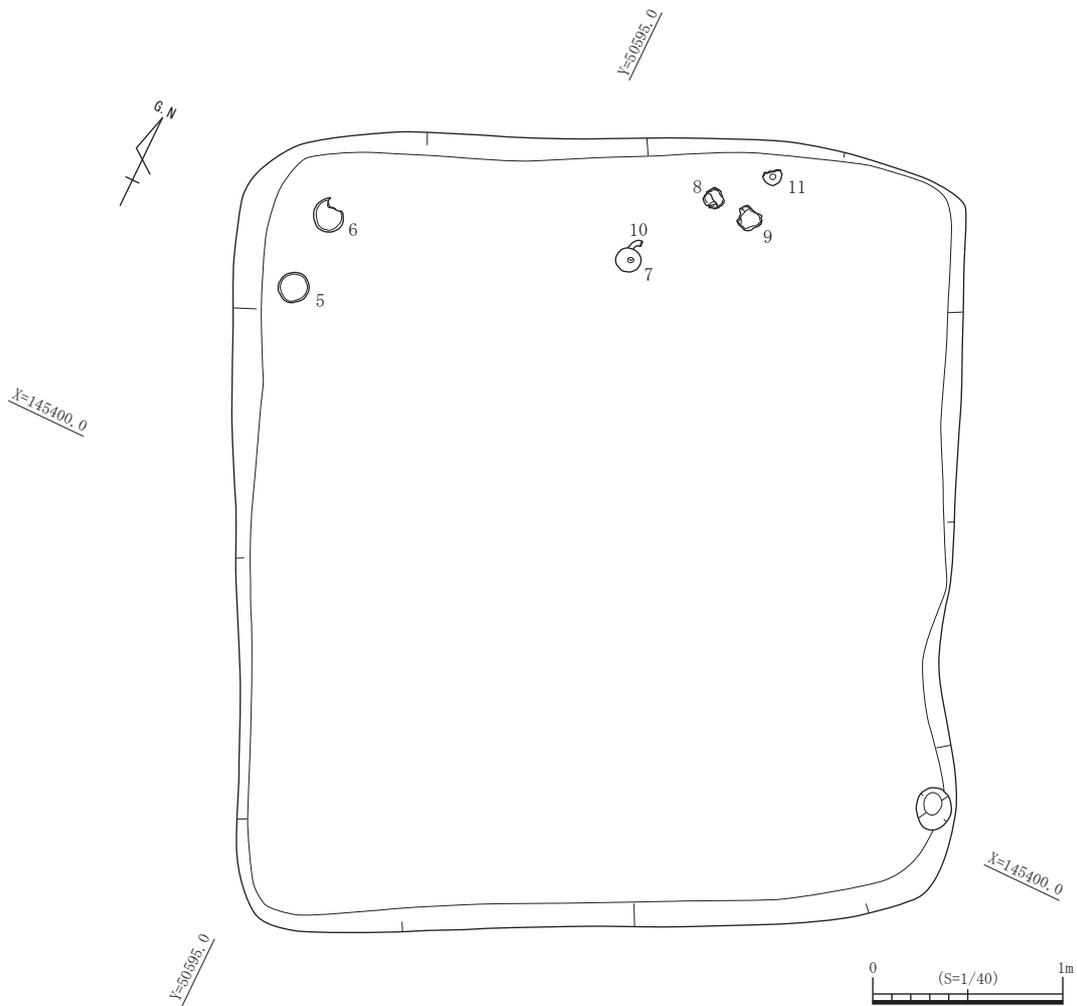


SH01 東西断面

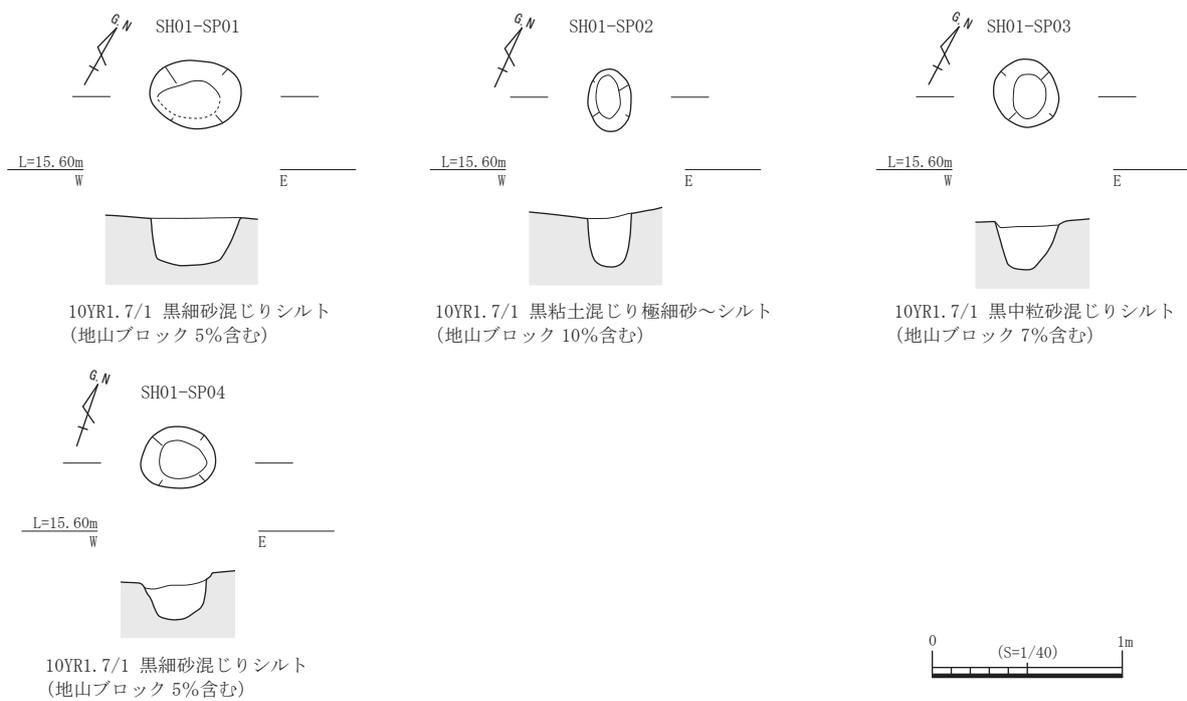


1. 黒色中粒砂混じりシルト
2. 黒色細砂混じりシルト (灰色シルト含む)
3. 黒色細砂混じりシルト
4. 灰シルト混じり細砂～極細砂

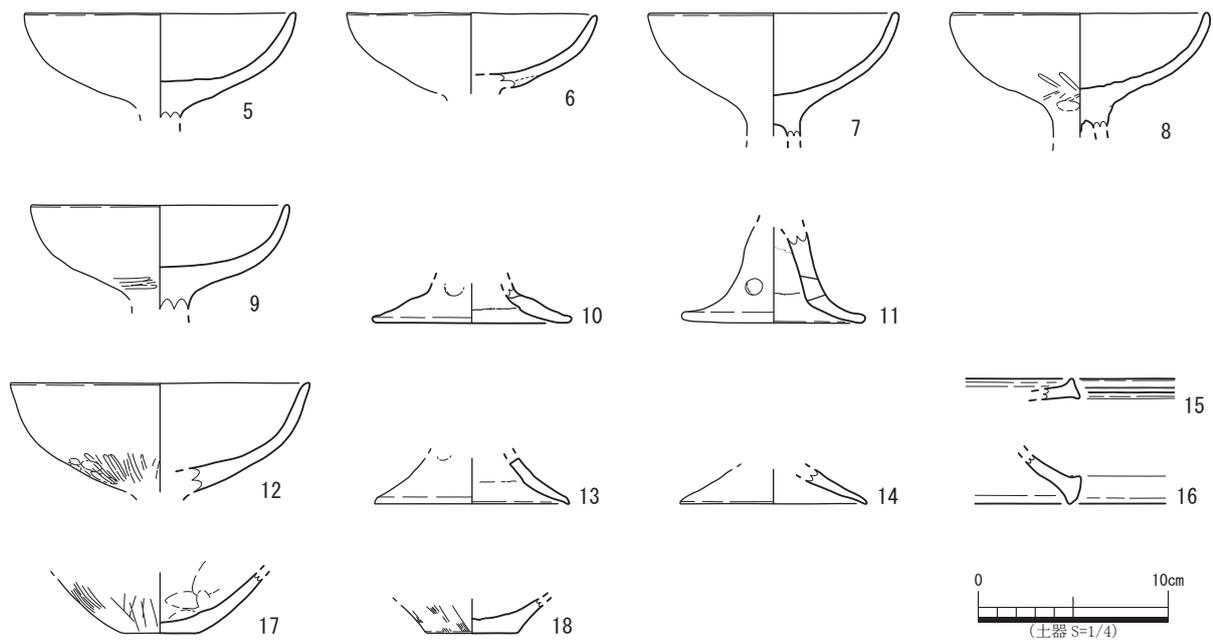
第13図 SH01 平・断面図 (S=1/40)



第 14 図 SH01 遺物出土状況図 (S=1/40)



第 15 図 SH01 ピット平・断面図 (S=1/40)



第16図 SH01 出土遺物 (S=1/4)

5～11は貼床直上で出土した高杯である。時期は古墳時代中期後半である。5～9は杯部で、口径は13～14cm程度である。10・11は脚部で、11には穿孔が3ヶ所施されている。12～16は、埋土から出土したもので、12～14は古墳時代中期後半の高杯である。15・16は弥生時代後期前半の遺物で、15は甕の口縁部、16は高杯の脚部である。どちらも角閃石を含んでいることから香東川下流域産土器であることが分かる。17・18は掘方から出土した底部片である。

第1表 土器観察表

番号	遺構名/層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1	SD01	弥生土器	甕		(15.6)	—	[21.0]	ナデ・凹線文2条・ハケ目・ヘラミガキ	ナデ・指頭圧痕	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	普 3mm以下の角閃石・石英・長石・雲母を含む	良	外面:煤
2	SJ01 壺棺	弥生土器	壺		(20.0)	(12.4)	[5.2, 34.6]	ナデ・ヨコナデ・板ナデ・竹管文	ナデ・ヨコナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	普 7mm以下の石英・長石、5mm以下の角閃石・赤色粒を含む	良	内面:粘土紐接合痕 外面:黒斑あり
3	SJ01 蓋?	弥生土器	高杯	杯	(33.4)	—	[5.7]	回転ナデ・ヘラミガキ	ナデ・マメツ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	普 6mm以下の角閃石・石英・長石を多量に含む	良	
4	SJ02 壺棺	弥生土器	壺	体部	—	—	[35.3]	ナデ・ミガキ	ナデ	5YR6/2灰褐色	2.5Y5/1黄灰	普 5.5mm以下の角閃石・石英・長石・赤色粒を含む	良	
5	SH01 貼床直上	土師質土器	高杯	杯	14.3	—	[5.5]	ナデ・マメツ	ナデ・マメツ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y6/2灰黄	普 3mm以下の石英・長石を多量に含む	良	
6	SH01 貼床直上	土師質土器	高杯	杯	13.2	—	[4.5]	ナデ・マメツ	ナデ・マメツ	10YR8/4浅黄褐色	10YR7/3にぶい黄褐色	普 3mm以下の石英・長石、2mm以下の赤色粒を含む	良	外面:接合痕
7	SH01 貼床直上	土師質土器	高杯	杯	13.2	—	[6.5]	ナデ・マメツ	ナデ	5YR7/6橙	10YR8/6黄褐色	普 4mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
8	SH01 貼床直上	土師質土器	高杯	杯	(13.3)	—	[6.7]	ナデ・指押さえ・工具痕・ヘラミガキ	ナデ・マメツ	7.5YR7/3にぶい橙	2.5Y7/1灰白	普 3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
9	SH01 貼床直上	土師質土器	高杯	杯	(13.6)	—	[5.5]	ナデ・マメツ・ヘラミガキ	ナデ・マメツ	7.5YR6/4にぶい橙	2.5Y7/3浅黄	普 1mm程度の石英・長石・赤色粒を含む	良	
10	SH01 貼床直上	土師質土器	高杯	脚	—	(10.4)	[2.1]	ナデ・マメツ	ナデ・マメツ・粘土紐接合痕	10YR6/2灰黄褐色	10YR7/3にぶい黄褐色	普 2mm以下の石英・長石を少量含む	良	穿孔1ヶ所
11	SH01 貼床直上	土師質土器	高杯	脚	—	9.6	[5.1]	ナデ	ナデ・絞り	7.5YR7/4にぶい橙	10YR7/2にぶい黄褐色	普 1mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	穿孔3ヶ所 内面:しぼり
12	SH01 埋土	土師質土器	高杯	杯	(15.8)	—	[5.8]	ヘラミガキ・ヨコナデ・指頭圧	ヨコナデ・指頭圧	10YR8/4浅黄褐色	10YR7/3にぶい黄褐色	普 3mm以下の石英・赤色粒、2mm位以下の長石を含む	良	
13	SH01 埋土	土師質土器	高杯	脚	—	(10.3)	[2.4]	ナデ	ナデ	5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	普 3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
14	SH01 埋土	土師質土器	高杯	脚	—	(9.8)	[1.8]	ナデ・マメツ	ナデ・マメツ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	普 5mm以下の石英・長石を含む	良	
15	SH01 埋土	弥生土器	甕	口縁	—	—	[1.1]	ナデ・沈線2条	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	普 2mm以下の長石・赤色粒・角閃石を含む	良	
16	SH01 埋土	弥生土器	高杯	脚	—	—	[2.6]	ナデ	ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	普 2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良	
17	SH01 掘方	土師質土器	不明	底部	—	(4.4)	[3.2]	ハケ目・マメツ	指頭圧・マメツ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	普 2mm以下の長石を含む	良	
18	SH01 掘方	土師質土器	不明	底部	—	(4.8)	[1.8]	ハケ目・ナデ	ヨコナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	2.5Y7/2灰黄	普 2mm以下の石英・長石を含む	良	

第IV章 まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代後期前半及び古墳時代中期後半の遺構を検出した。以下、各時代の遺構について周辺の調査結果を踏まえて概観する。

(1) 弥生時代後期前半

溝1条と土器棺2基、土坑を検出した。第17図をみると、弥生時代後期前半の居住域は1次調査B・C区及び3次調査区を中心に展開しており、太田下・須川遺跡内でも微高地上に存在する。一方、本調査区は低地部にあたり、周辺からは溝や土器棺が検出されていることから居住域以外の利用が行われていたと考えられる。

土器棺については1次調査E区以東に4基存在するが、墓域として配置された様相はみられず点在する。1次調査H・I区に自然流路SR03・04がみられることから、居住域としても生産域としても利用しにくい範囲に土器棺が埋置された可能性が考えられる。

(2) 古墳時代中期後半

竪穴建物跡1棟を検出した。第17図をみると、古墳時代中期後半～後期前半の居住域は1次調査E・F・G区を中心に展開しており、微高地からやや下がった範囲に存在する。本調査区は、地形から居住域の東端にあたると思われる。

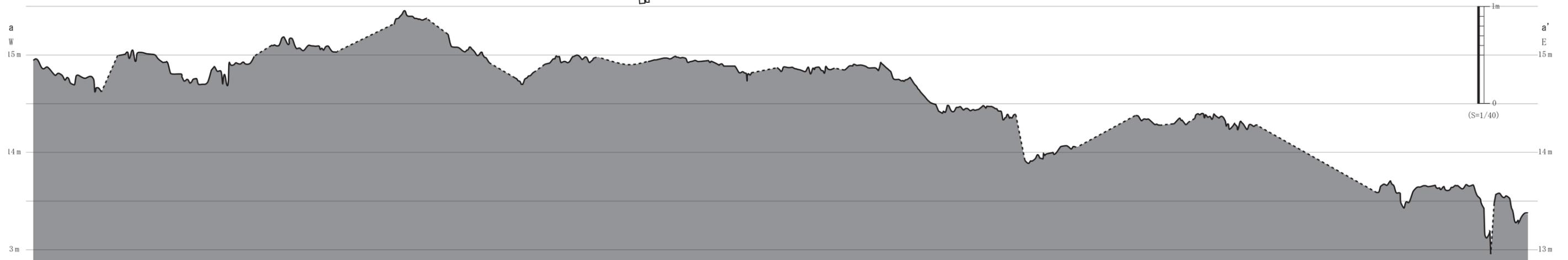
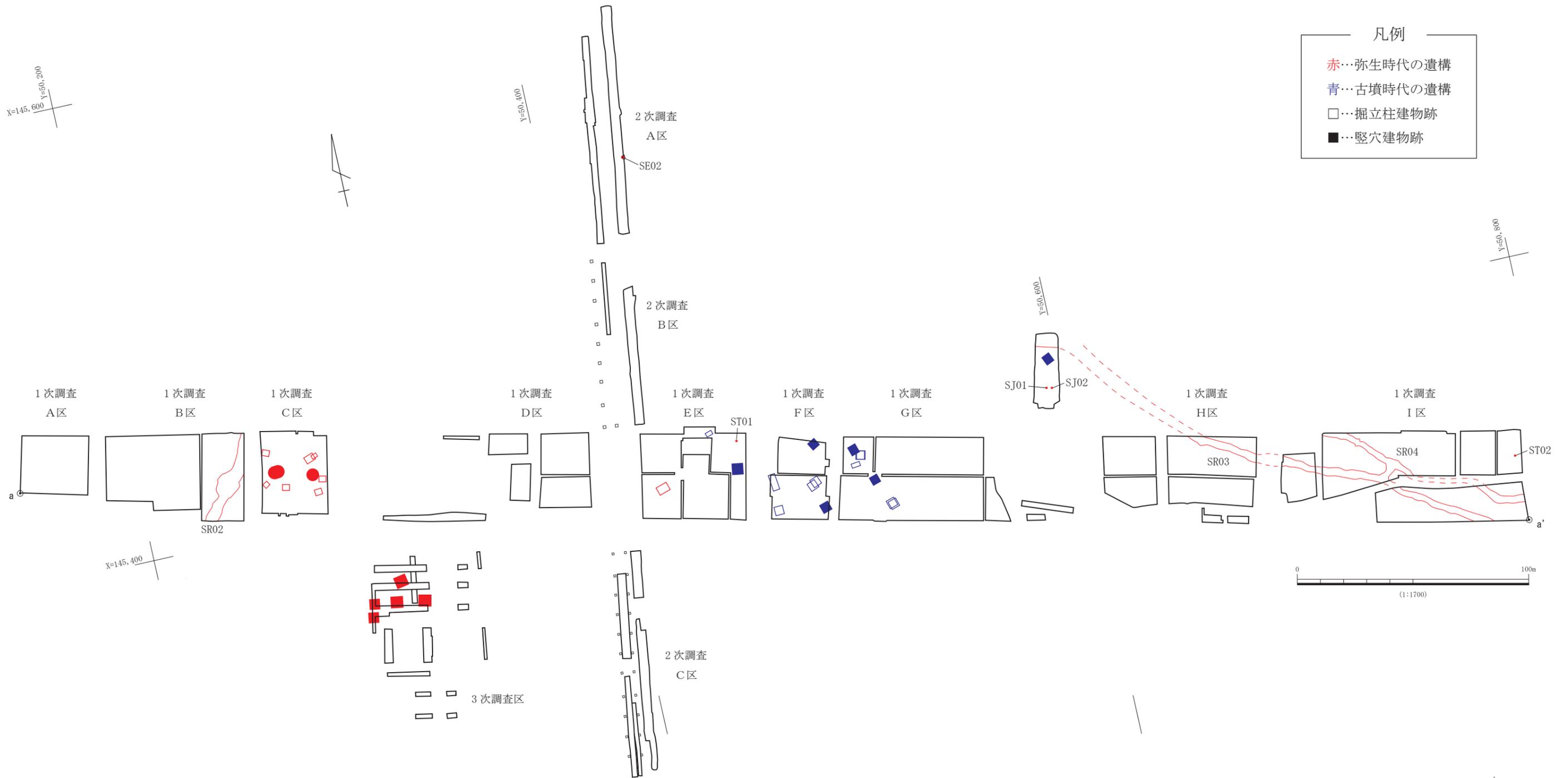
太田下・須川遺跡で検出された竪穴建物跡は、大きさが約4～5m四方でカマドは検出されておらず、支柱穴は4基であるものが多い。本調査区で検出された竪穴建物跡も同様な性質をもち、一連の集落に属するものであると考えられる。

参考文献

香川県教育委員会編 1995『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

高松市教育委員会編 2009『太田下・須川遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第124集

高松市教育委員会編 2014『太田下・須川遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第151集



断面図は、香川県教委（1995）『太田下・須川遺跡』P23・24の図から地山上面の高さを抽出して作成した。

第17図 調査地周辺の地形と検出遺構 (S=1/1,700)



写真図版



SH01 遺物出土状況



調査前風景



基本層序



SD01 完掘状況



SD01 遺物出土状況



SD01 断面 (遠景)



SD01 断面 (近景)



SD01 出土遺物 (1)



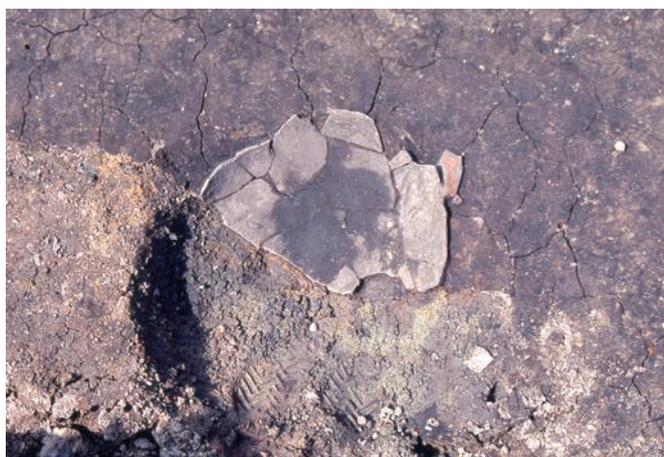
SJ01 検出状況



SJ01 完掘状況



SJ02 検出状況



SJ02 完掘状況



SJ01 出土遺物 (2)



SJ02 出土遺物 (4)



SH01 検出状況



SH01 遺物出土状況 (5・6) 出土状況



SH01 遺物出土状況 (7～11) 出土状況



SH01 完掘状況



SH01 断面



SH01 出土遺物



SK02 検出状況



SK02 断面



SK03 完掘状況



SK03 断面



SK07 検出状況



SK07 断面



SK11 完掘状況



SK11 断面

報告書抄録

ふりがな	おおたしも・すがわいせき (だいよじちょうさ)							
書名	太田下・須川遺跡 (第4次調査)							
副書名	太田下町眼科新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第196集							
編著者名	梶原 慎司							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦2018年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
おおたしも・すがわいせき 太田下・須川遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 おおたしもまち 太田下町	37201	10598	34° 18' 35"	134° 02' 59"	2017.10.23 ～ 2017.10.27	300 m ²	眼科新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		おもな遺構		おもな遺物	特記事項	
太田下・須川遺跡	集落跡	弥生時代後期前半		溝・土器棺 ・土坑		弥生土器		
		古墳時代中期後半		竪穴建物跡		土師器		
要約	<p>弥生時代後期前半の溝1条・土器棺2基・土坑を確認した。本調査区は低地部にあたり、周辺からは溝や土器棺が検出されていることから居住域以外の利用が行われていたと考えられる。</p> <p>また、古墳時代中期後半の竪穴建物跡1棟を確認した。本調査区は、1次調査で確認した居住域の東端にあたりと考えられる。</p>							

眼科新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

太田下・須川遺跡 (第4次調査)

平成30年9月30日

編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号

発行 山地 英孝
高松市教育委員会

印刷 有限会社 中央ファイリング